天使の梯子

紫月

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20781606

ヒュンマ, 闘志と天使でヒュンマの日

この空の色が 教えてくれました
こんなにもあなたに 恋していること

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

同志さま方の天才的なひらめきにより、10月４日は「とう・し と てん・し でヒュンマの日」と制定されました。いやあ、皆さん、すごい。
そこで2023年10月４日、公開させていただいた話になります。
当初は特にアイデアもなく、皆さまの作品を楽しませていただく心積もりでした。
が、９月の終わりにとある美しい音楽を聴いているときに「曇り空を背景にした話を書きたい」という思いが湧き上がり、そこから「あれ？これ、〟天使〃に絡めることが出来るんじゃない？」と、突発的に書いたものです。
短期間で書いたので筆の荒れが心配ですが、このチャンスにお祭りに参加してみたかったのです……その一点に於いて、自分では満足しています。

自分自身は正直、曇り空はあまり好きではありません。けれど、それをなるべく美しく描くことを目標としました。
停滞した雲のように、動きも言葉もなく、ただそこに在る姿を書きたかった話。台詞を極力削っているのも、意図的なものです。
結果、ヒュンケルとマァムが、何もせずほとんど語りもせず、ふた

りでいるだけの話になりました。その中に漂う気配、声にしない心を感じ取っていただけたら幸せです。

ん？「とう・し はどうなった？」ですって？
そ、それはまたいずれ、書けたらいいなっ！

素敵な表紙はこちらからお借りしました。illust/73753445

天使の梯子

Side Maam

曇り空は、好きではなかった。
幼いころに圧倒的に好きだったのは晴れた日で、太陽の下で駆け回って村の子どもたちと遊ぶ昼下がりは、活発な少女だったマァムにとって、至福の時間だった。澄んだ空は明るく綺麗で、小川や池の水面がきらきらと踊る様は眩く胸をときめかす。迷い込めば恐ろしい森の樹々さえも、昼間の光で遠目に見れば、揺れる梢の緑が瑞々しかった。
元気に動き回り、夜はこてんと眠る幼少期だった。だからその時代、夜空を眺めた経験はあまり多くはない。それでもごく稀に——例えば、お祭りの後の興奮が冷めないときなどに——窓辺から見た空が晴れていれば、そこには無数の星影たちを見ることが出来た。
起きてベッドから抜け出していることが母に知られれば、叱られてしまう。けれどそれだけの理由ではなしに、マァムは息を潜めて金や銀の小さな輝きを眺めたものだ。かそけき光は、ほんのわずかな吐息にさえ消えてしまうような気がしたから。
晴れた日に比べれば、雨の日は魅力が乏しいように思われた。外で遊べないということは、彼女にとっては大きな減点要素だったのである。
だが、雨に閉じ込められるときにも楽しみはあった。母の焼くおやつの香りは、湿り気を帯びた空気の中では何故か濃く漂ったし、庭の芝生や前栽の色、季節によっては咲く花の色は常より鮮やかに感じられ、美しかった。
洗濯の出来ない母は、そんな日には縫い物をすることが多い。新しい服も楽しみではあった。でも一番楽しかったのは、母の口から語られる思い出話。かつて出た冒険の物語には、若かりしころの母と、今はもういない父の生き生きとした姿があった。

そして、雨はやがて上がる。重要なのはそこで、雨垂れのリズムにじっと耳を傾けていれば、必ずまた太陽は顔を覗かせてくれるのだ。洗い上げられ、新鮮に生まれ変わった世界の上に。
そうした輝かしい光景とは異なり、曇り空は、どうにも中途半端なものに思われた。どんよりと重い雲は陰鬱で、目に映る何もかもは、どこかしらに灰色の影を含む。空を渡る鳥の鳴き声も憂鬱そうに、冷たい空気をひたすら耐えているように聞こえた。
つまらないお天気。
朝起きて寝室のカーテンを開け、太陽が姿を隠していることを知ると、マァムはぷくりと頬を膨らませたものだ。まだ始まったばかりの一日をやり過ごすのが、とても厄介で億劫なことに思われて。
あの日々から十年ほどが経ち、大人になったマァムは、さすがに頬を膨らませてむくれたりはしない。それでも長らく、曇った日は好きではなかったのだ。
いつからだろう。そんな空模様が胸に沁みるようになったのは。
はっきりとは覚えていない。けれどおぼろげに、それは、隣を歩くヒュンケルに出逢ってからのことだったような気がしている。

パプニカの海は、基本的に優しい顔をしている。
一年を通して温暖な気候に恵まれていることが大きいのだろう。風のよく吹く国であるから波が高くなることだってあるのだが、照り返す陽光に煌めき上空に海鳥たちが舞う様子は、豊かな生命力を思わせ、この地に在る全てを祝福しているように見えるのだ。(事実、近海には魚介類が豊富で、国民や旅人の舌を楽しませている)。
晴れることの多い土地で、風光明媚で名高い海。けれどもちろん、天気の崩れることもないわけではない。
今日は、朝から王宮を訪れていた。大魔王との戦いから三年近く。黒の核の爆発に巻き込まれて姿を消していた勇者がようやくレオナの元に戻り、その見舞いのためだった。当初は記憶の定かでないところもあり仲間たちをやきもきさせたダイであったが、数回の見舞いを重ねるうちに徐々に過日の表情を取り戻しつつある。それに伴いレオナの笑顔も増え、兄姉弟子たちもほっとしているところだ。
仲間たちが揃って顔を出すこともあれば、各自がばらばらに訪問す

ることもある。今日は前者だった。
——せっかくだから、昼食を食べていってよ。
一年前に戴冠を済ませ、今や一国の女王となったレオナが多忙なことは理解していた。けれど、そんなことは誰より本人が解っているだろうし、それでも久々に気が置けない仲間との一時を持ちたいと願う気持ちを無下には出来なかった。
——悪ィ。どうしても外せない用事があるんだわ。
済まなそうに言って帰っていったポップは、午後にベンガーナの国王に謁見の約束があるらしい。若い稀代の大魔道士は、今や世界の重要人物だ。各国の協力を取り付け進めている魔法研究所の設立に関する面会とあれば、引き留めることなど、出来るはずもない。
結果、昼のテーブルはレオナとダイ、ヒュンケルとマァムの四人で囲むことになった。予定された席ではなかったから正式な王宮料理には遠い午餐であったが、パプニカの海と大地の恵みに溢れた、心尽くしの料理であったと思う。
ゆっくりと食事を終え、別れを惜しみながら城を辞した。そして何となく離れがたい気持ちに背を押されるまま、今、マァムとヒュンケルはどちらから誘ったでもなく、ふたりで砂浜を歩いている。空も海も紺碧とは言えない、鈍色に染められた午後だ。
南西から渡ってくる風は、大分強くてふたりの髪を乱していくが、どこかほんのりと甘く、温かい。そういえばこの海の先には故郷のロモスがあるのだと思えば、マァムはひとり、幸せな気持ちになる。ほんの一時邂逅しただけの旅する風が、親しいものに思われる。
隣を歩くヒュンケルは、どんな気持ちでいるのだろう。先ほどからふたりは何も話さず、ただゆっくりと歩を進めているばかりだ。
そっと盗み見た横顔には、喜びの色も、悲しみや怒りの影もない。
ただ平らに凪いだ瞳で、水平線の更に向こうを見ているようだ。
こういう表情をする人を、見たことがないわけではない。緊張から解き放たれ、風に吹かれるままに心をなびかせているような顔。人によっては、ややぼんやりしているようにも見えなくはないだろう——ヒュンケルの場合は、端正な容姿のためか、どこか神様の創った彫像めいて見えるけれども。

最初にこの表情を目にしたときは、内心ひそかに驚いた。常に強くて大きい兄弟子が、こんな顔をするのは珍しいと思って。
しかしそれが二度三度と重なると、もしかしたらこれが彼の素顔であるのかも知れないと考えるようになった。そして、それを彼が曝け出すのは、決まってふたりきりの、曇り空の日であると気が付いたのは、しばらく前のこと。
もしかしたら、ヒュンケルも意識していないのかもしれない。けれどその条件に思い至ったとき、マァムの胸は、どこか切なさに似た甘酸っぱい気持ちでぎゅっと締め付けられたのだ。
暗い地底の城で育ち、一度は同胞とも敵対した彼の人生。出逢ったころの荒んだ眼差しを思い出せば、それはきっと、つらいことも多い道程だったのだろうと想像がつく。怒り、憎しみ、苦しみ、そしてやるせない悲しみ——そうした感情に慣れ親しんだ双眸には、太陽光に満ち溢れた風景は、未だ眩しく痛みを覚えるものであるのだろうか。
けれど、直射日光を厚い雲が隠してくれた下は、今のヒュンケルにとっては優しく居心地のいい場所であるのかもしれないと思う。もちろん、いずれは明るい陽光の下で、思うまま破顔する姿を見てみたいとも願うけれど——でもそれは、少しずつ少しずつ、彼がこの地に馴染んでいくことで得られるものであるのだろう。
気付けたときに、曇り空はマァムにとって愛しいものになった。かつてはどっちつかずに感じられた薄暗い色が、晴れでも雨でも、いかようにでも変われる懐の深いものなのだと感じられたから。
ざざざざ……ざん……。
打ち寄せる波が白い泡となり、重たげな砂浜を洗って、また沖へ帰る。沖合いを低く飛ぶ鳥が一声高く鳴き、風に踊るように滑空した。
ありのままの彼が生きる世界は、こんなにも美しい。
——違う。逆だ。世界はきっと、元々どんなときにも美しいところで、幼い日々には彼女はそれを知らずにいただけなのだ。ヒュンケルと出逢い、時に別離の不安や悲しみや、苦い感情のあれこれも味わって、自分の目はようやく真実に向けて開かれたのではなかったか。

瞬間、マァムの胸にすとんと落ちる思いがあった。
ああ——もしかしたら、これが恋というもの、だったのか。
我知らず涙が溢れそうになった。雫を頬に溢すまいと、心持ち顎を上げて、遠く空と海の交わる場所を見定めようとする。その境目は、曖昧に滲んではっきりとは見えない。

「あっ……」
思わず声を漏らしたのと、ヒュンケルが息を呑んだのは、おそらくほぼ同時だった。
重く垂れ込めた雲を割って、幾筋かの光が注いでくる。まっすぐに、まるで清らかなものが伝い降りてくるかのようにそっと下ろされたそれは、柔らかであるのに、薄暗さに慣れた目には眩しいほどに、金の粒子を振り撒いて輝いていた。はるか天上から、この世のものとは思われぬ音色が、宙を舞い海を越えて、直接胸に響き渡るように感じられる。
「綺麗……」
何を考えるまでもなく、ぽつりと感慨を溢した。するとその耳に、ヒュンケルの穏やかな声が響く。
「天使の梯子だな」
「天使の、梯子？」
肩越しに振り返りながら問う。なんて美しい表現なのだろうと思った。甘い言葉ではあるのかもしれないが、きりっと引き結ばれた青年の唇から放たれたそれは、ただただ眼前の光景に相応しく、神々しさを感じさせる。
「ああ。いつだったか、アバンから教わった。最初はいかにも彼らしい、甘ったるい戯れ言だと思ったが、あのように雲を割ってまっすぐに射し込む光を指してそう言うのだと、後に書物でも読んで知った……アバンには悪いことをしたな」
語りながらヒュンケルは、ほんの少し瞼を伏せる。長い睫毛が頬に影を落として、マァムは切なさを覚えずにはいられなかった。胸を満たす感情が溢れ出てしまわないように唇を噛み、顔を正面に戻す。
きっと彼は、美しい言葉を口にしながら、それでも拭い去れない後

悔をたくさん抱えて、この一時を生きているのだろう。それでもこの人が、今ここで生きてくれていることがうれしい。それでいい。それでもいいのと叫びたかったが、そうすることが正しいことだとは思えなかった。
「そう……名前も綺麗なのね」
それで、彼女は、そう一言だけを返す。言葉でなく沈黙が伝えてくれるものもあると信じ、願いながら。
ふたりはそのまま、黙って目の前の光景に見とれる。光の奇跡が消え去るまで。あるいは、風が冷たく肌寒くなるまで。

Side Hyunckel

曇り空は、安心出来た。
いつからそんな風に感じるようになったのか、記憶は定かではない。そもそも地底の城を出、師に連れられて地上を旅するようになるまで、この地には様々な天気や気候の存在することすらヒュンケルは知らずにいたのだ。故郷にあったのは、常に静かに停滞する闇だけだった。
初めて雨を見たときに驚いたことは覚えている。突然身を打ち付ける驟雨に、あるいは害意を持った敵の襲来かと身構えた。アバンと共に近くの大樹の陰に逃げ込み、そこで、雨が地上で果たす役割を教えられた。雨水は大地に浸み込み惑星を巡って、その旅路の終わりに天へ戻って再び降り注ぐ。その過程で、地上の全ての生命を潤すのだという。だがそう聞いても、語られる物語に全く心は動かなかった。その後、雨上がりに出た虹の鮮やかな色彩にも、透明に洗い上げられた空の、抜けるような青さにも。それでいて、一連の記憶は実に鮮明だ。
その思い出とは違い、最初に見た曇り空のことは、胸に留めるまでもなく忘却の彼方に流れてしまった。旅の中、今日は曇っていますねえと残念そうに呟く師の言葉を何度か聞くうちに、ああ、これが

曇るということなのかと少しずつ認識していったのだろう。
雨は、単純に鬱陶しかった。かと言って、晴れた日は、到底好きにはなれなかった。陽射しは目に眩しかったし、草も鳥も人間も、あらゆるものが生を謳歌しているように見えて気に入らなかった。それに比べ、曇り空はいい。何もかもが気だるげで、師の好む明るい日でないというだけで、すっと溜飲が下がる気がした。
少しばかりは成長し大人になった今、そんな底意地の悪い思いはすでにない。
それでもヒュンケルは、曇った日にはわずかに気持ちが凪ぐように感じる。呼吸がしやすい心地がしている。

今日は、少し波が高い。
パプニカは、風を国の象徴のひとつに数える国だ。この地の海は決してのっぺりと無表情なものではなく、風に煽られ常に移ろい豊かな顔を見せると思う。それでも明るい太陽の下では(これもまた、この国の象徴だ)、高く立ち上がる波も陽気に楽しげに見えるのか。今日のような曇り空の下、うねりはいつも以上に力強く映るのは、不思議なことだ。
この国の海岸を語るとき、多くの人間は、真っ青な空と煌めく水面、そして白く陽光を乱反射する砂浜を想像するのだろう。だがヒュンケルには、そんな晴れやかな光景よりも、この午後のような物憂げな色合いの方が好ましく思える。
もちろん、雲ひとつない青い空を美しいと思うことはある。許されない手段を選んだとはいえ、かつて大魔王・バーンがその明るさを手に入れようと求めた気持ちも理解は出来る。
しかし迷いなく照り付ける太陽光は、ヒュンケルには少々刺激が強過ぎ、痛いのだ——暗闇の中で育った目にも日焼けの経験のほとんどない肌にも、心にも。だからどうしたって、ヒュンケルは瞳を伏せ、明るさから目を逸らさずにはいられない。
でも曇った日には、そんな責め苦が多少は和らぐように感じる。いつもは純粋に青い空に、黒い絵の具を一滴二滴と垂らしたような色は、幾ら正義の道を生きると決意したとはいえ消せない過去を背負う己のような男に、どこか似通っている気がする。親近感とはまた

違うのだが、存在を許される心地とでもいえばいいのだろうか。鼠色の空も魂も、そこに在っても仕方ないではないかと、優しい諦念に身を浸す。
そんな安心故、曇り空の日には、肌をすり抜けて自分の素直な気持ちが外界に滲み出ていく瞬間が、しばしばあることを自覚していた。それは過去に於いては、自身の弱点であったり急所であったりした柔らかい感情だ。必死に鎧の下に隠し続けてきた思いも、薄暗い場所でなら誰にも見咎められないと、気が緩んでしまうのかもしれない。
だからといって、ところ構わず相手を選ばす、心の奥底を見せることは出来ないけれども……解っていた。ついついそうしてしまうのは、今、隣に立つ女性の前に限られているということは。
よくよく考えれば矛盾している。マァムはむしろ、太陽の明るさこそが似合う人間で、どんよりと重い翳りなど、見た記憶はほとんどないのに。
それでも、こうまで警戒心が薄れてしまう。その理由を本当はどこかで理解している気もしたけれど、ヒュンケルは、いつもそこで思考を止める。自身の深奥に踏み込むことで、傷付くのも怖かった。それ以上に、優しい妹弟子を苦しめ、側にいられなくなる未来に恐怖していた。
まったく、臆病なことだ。
自嘲する思いが、ふっと唇を割り、小さな笑い声となって漏れる。マァムが横目でこちらを見て、すぐにまた、沖合いに視線を戻す気配がした。低く舞う海鳥に気を取られた振りをして。
ヒュンケルも倣う。水平線ははるか遠くにぼんやり霞み、空の色はどこまでも複雑で、何とも名前の付けづらい風情だ。彼の心が溶け出し、そのまま虚空を染め上げたように。
一際強く、風が潮の香りを運んだ。上空でも雲がさざめく様子が見える。

「あっ……」
思わずといったようにマァムが声を漏らすのと、ヒュンケルが息を呑んだのは、おそらくほぼ同時だった。

重く垂れ込めた雲を割って、幾筋かの光が注いでくる。まっすぐに、まるで清らかなものが伝い降りてくるかのようにそっと下ろされたそれは、柔らかであるのに、薄暗さに慣れた目には眩しいほどに、金の粒子を振り撒いて輝いていた。はるか天上から、この世のものとは思われぬ音色が、宙を舞い海を越えて、直接胸に響き渡るように感じられる。
脳裏に甦る光景があった。刹那の間、意識を過去に引き戻され、声も瞬きも呼吸も忘れる。
我に返ったのは
「綺麗……」
と呟く、いかにも感慨深げなマァムの声が耳に届いたからだった。
「天使の梯子だな」
「天使の、梯子？」
鸚鵡返しに問いながら振り向くマァムは、小首を傾げ、その仕草はまるで、もっと幼少の少女の様を思わせる。
「ああ。いつだったか、アバンから教わった。最初はいかにも彼らしい、甘ったるい戯れ言だと思ったが、あのように雲を割ってまっすぐに射し込む光を指してそう言うのだと、後に書物でも読んで知った……アバンには悪いことをしたな」
あるいはあの日のヒュンケルも、師の前でこんな風に首を傾げていたのだろうかと思う。想像してすぐに、いや、自分はこんなに愛らしく素直な顔を見せることは出来ていなかっただろうと、ほろ苦い気持ちになった。後悔と申し訳なさと今より大分若かった師の面影への思慕と、幾つもの感情が波のように打ち寄せて、胸の中で混ざり合う。
ヒュンケルの内に去来する思いを、マァムが知るはずもない。が、わずかに目を伏せた兄弟子を見て、彼女は余計なことは言わず、短い返事だけを発して正面を向き直った。
「そう……名前も綺麗なのね」
そのまま、眼前の奇跡に見惚れている横顔から、ヒュンケルも視線を沖合いに移す。
先刻、心を過った光景に、黙ったまま身を委ねた。
マァムは、覚えているだろうか。

ヒュンケルが魔の世界から抜け出した日。真っ暗に重い闇の中から這いずり出した日のこと。
勇者の剣に倒れ死を覚悟したヒュンケルに救いとぬくもりを与えてくれた彼女の頭上からも、今日と同じく天からの光が降り注いでいた。呪われた運命に唾棄しながら、泥にまみれて生きてきた己。なのに向けられた慈愛の微笑みを縁取った光の、どんなにか優しく清白だったかということ。
おそらくは覚えていまい。マァムは空に背を向けていたし、それに彼女にとって、他者に優しさを差し出すことはごく日常的な行動で、記憶に留めるような特別な場面ではなかったのだろうから。
けれど、ヒュンケルにとっては特別だった。最期の瞬間まで消えることのない、人生の意味を見出だした、唯一無二の出来事だった。
かつての自身が、暗闇に親しさを覚えながらも、ほんのわずかな憎しみも同時に抱いていたことを否定は出来ない。明るい場所へ焦がれる思い、憧れを知れば、そこに立てない自分が悲しかった。日光に負け、焼けてしまう肌しか持たない自分を嘆いた。そして、虚勢を張るように光を憎悪する振りをした。
神だとか運命だとか、そんなものは信じていなかった。自分の行く先を決めるのは、自分の力量だけなのだと、震える心を鼓舞しながら生きてきた。
だがあのときに、拒みようもなく知らされた。天は彼を見捨ててはおらず、救いと赦しの手を持つ者は遣わされてきたのだと。
実際にその手を握ったことはない。でも彼の魂は、少女のかたちをした手に縋り付き額づいて、初めて泣くことが出来たのだ。かつて喪った愛を追憶の中に弔ってから、長い年月を経てようやく。
重く暗いものに押し込められていたからこそ、見えた光があった。
天使の梯子。あの光に、これ以上に適切な名があっただろうか。
感謝と崇拝と憧憬を胸に、ヒュンケルは光の筋を見つめる。この想いは、生涯尽きることはないと、彼は信ずる。
ざざざざ……ざざ、ん……。
それはおそらく、風や波や星が、悠久の旅を終えないにも似て。